

# 形容詞研究とその問題解決のための一考

金 井 満

## 0. はじめに

獨協大学形容詞研究会では、ミュンスター大学のフンツヌルシャー教授との国際共同研究において、氏の形容詞の語彙分類に意味論と意味分類法に語用論的観点を加えて新たな分類を試みてきた。またドイツ語学習者が陥りやすい異なった語彙体系を習得する際の問題点も併せて考察してきた。さらに最終的にはこれらの語彙をデータベース化し、ネットワークを通じて簡単に検索できるようなシステムを構築することも目標としてきた。

本論文では、フンツヌルシャー教授の観点を整理し、語用論的な観点からの見直しと、語彙検索システムを構築する際の問題点を明らかにするために、認知科学的なアプローチ、特に心的記述の問題を扱っていきたいと思う。

## 1. 基本概念の概観

はじめにフンツヌルシャー教授の „Lexikalische Semantik und Sprachunterricht“<sup>(1)</sup> において示されている基本コンセプトを概観しておきたいと思う。

### 1.1. 方法論的基礎について

氏は、「言語学は自らの研究領域における実践的な利用可能性を明確にすることを他の領域に委ねてきた」<sup>(2)</sup> とし、上記の論文における 2つの目標を以下のように掲げている。

- 言語理論と言語実践の関連を、語彙意味論を例として明白にすること
- これまでの文献ではあまり顧みられてこなかった外国語教育の分野、つまり語彙の獲得という分野において例を示しながら新しい方法を示すこと<sup>(3)</sup>

氏は、「語用論的な言語モデルにおいては、口頭によったり、文字によったり、あるいは私的であったり、公的であったり、日常会話的であったり、専門的であったりというように言語は、様々な出現形態と利用方法において人間生活の一部として捉えられている。言語的な表現は、行為の関連に埋め込まれている。」<sup>4)</sup>と述べている。この考えに基づいて、人間の行為に一般的に当てはまり、条件や手段、目的の基本的な関連としての見なすことが出来るような分析のための枠組みが見いだされるとされている。さらに「発話をするということは、与えられた状況に即した条件で、ある特定のコミュニケーション上の目標を達成するための行為手段である。」<sup>5)</sup>と規定し、言語的な発話の一般的な目標というのは、人間同士の相互理解であるとする。このコミュニケーション上の目的というのは、J. オースティンと J. サールの発話内行為のタイプと捉えられ、以下のような4つのタイプへの書き換えが試みられる。

repräsentative Sprechakte (陳述表示型発話行為)

directive Sprechakte (指令型発話行為)

kommissive Sprechakte (行為拘束型発話行為)

declarative Sprechakte (宣言型発話行為)

これに基づいて、「理解は、話し手と聞き手がコミュニケーション上の目標という観点で一致した場合に成立する。」<sup>6)</sup>とし、会話的な相互行為が前提とされる。個々の言語的手段は、言語共同体の中で成立する様々な意思疎通に関わり合う関心事に有効に働くように調整され、そのためにある発話の発話内力というのは、ある特定の発話行為を遂行するためのそれぞれの発話形態が慣習によって定められた適切性として理解されている。この適切性は、

1. 一つの発話は、状況による条件によって異なった発話行為を遂行し、
  2. ある発話行為は異なった発話によって実行される
- という二通りの適切性に区別されて考えられている。

この発話の適正性は、また統語論的構造や語彙的内容のような言語的な形態にも関わってくる。この統語論的な役割は、個々の発話行為のタイプに応じた一般的なマスターが担うことになる。陳述表示型の発話が例として挙げられて

いる。この種の発話は、名詞的主語、動詞あるいは形容詞述部と名詞あるいは前置詞目的語からなる標準形から成り立っている。このようなマスターによりドイツ語のほとんどの単文は作り出すことが出来るとされている。どのような表現が可能かというバリエーションは、個々の統語論的な位置を様々なタイプの単語で置き換えることで可能となるという。また名詞化変形や付加語化変形によっても動詞句の語彙の内容は、主部へと変換され、他の動詞句と組み合わせられて使用できることが指摘されている。さらに副詞を加えることによってもマスターが拡張されることも挙げられる。

標準形に基づいた単語の置き換えや付加による拡張以外にも、動詞の位置を移動させることによる拡張が次のテーマとなる。動詞を文頭に置くことによって作られる疑問文を例として、発話行為論では疑問文は解答を要求するための一種の要求文であることが指摘され、直接的な要求を表す命令文も同様に主語の省略や動詞を命令形にするというような標準形であるとされる。フンツムルシャー氏は、統語論に関しては、このような標準形という考え方に基づいて、ドイツ語では受動文や強調文のような単純な陳述文を基本とした拡張がなされ、発話の語彙的な構成要素が統語論によって一般的な機能を持った特定の文型にまとめ上げられるという考えに基づいているものと思われる。

フンツムルシャー氏は、単語に関しては、上で概観したような統語論との関係において、その語彙属性に基づいて、ある特定の機能を持った文型や語順に貢献する発話の内容を特徴づけるものとして見なす。氏は、発話行為論の観点から見た場合に、主語と述語からなる単純な文は、基本的な命題、基礎をなす事情を表現するものであるとし、これはある対象の特定とその対象を特徴づける付加情報を付け加えることであるとする。そしてこの付加情報は、もっとも単純な形では、動詞あるいは述語的形容詞によって表現されるものとして、形容詞の機能に着目していく。

フンツムルシャー氏は、まず形容詞の機能を以下の3つとして確認する。

- 述語的用法
- 付加語的用法

### • 副詞的用法

そして、もっとも頻繁に使用されるのは付加語的用法であり、文の意味への一般的な貢献は、物体であったり事柄・出来事であったり行為であったりする指示対象を特徴づけることが第一であるとする。第二の貢献は、特徴づけという働きの枠内において、異なる 2 つの単語の意味論的な対比を明確にするという効果であるとされる。意味論的対比とは、

nass vs. trocken

groß vs. klein

というような対比であり、上記のような極端な対比ばかりではなく、以下のような個々の単語の持つ後場の枠内で、単語の意味の段階的な変化とニュアンスの広がりがあることも指摘されている。

nass vs. feucht            trocken vs. dürr

groß vs. riesig            klein vs. winzig

フンツムルシャー氏は、語意味論の役割とは、「ある出来事を記述したり、評価したりする際に、言語的に表現しようと試みられる特徴的なそれぞれの差異を明確化することにある。」<sup>7)</sup> と述べている。このような明確化のために、ドイツ語では形容詞の領域で、世界や人間にとって重要なアスペクト、事情、出来事、行為に対する態度に関して特に正確で、細分化された発話を可能にするような語彙が形成されていると見なしている。

上記のような形容詞に対する考え方に基づいて、さらにフンツムルシャー氏の教授法に関する記述も概観してみたい。

## 1.2. 外国語教授法について

氏は、「広い観点で見た場合、母国語の授業において、生徒に可能な限り包括的な言語運用を教えるために、また外国語授業においては、新しい言語の習得を可能な限り効果的に始められるようにするために、個々の単語から始めて、その単語の異なった、場合によっては多様な使用方法を理解し、その使用方法のある言語のあらゆる語彙との関連において体系的に説明しようとする際には、

段階に分けられた方法というのが不可欠である。』<sup>8)</sup>と述べている。このような方法には、細心の注意を払って準備された教材が必要であり、語用論の観点から見た語学授業というのは、何よりも言語の使い方を練習して覚えることにあるとする。また外国語授業と母国語の授業とは、幼児期の言語獲得の観点から考えられなければならない点も指摘されている。フンツヌルシャー氏は、意味についての語用論的な使用法に関する理論は、「ある発話の関連においてのみ一つの単語は意味を持ち、言語的な行為との関連においてのみある言語的な発話はコミュニケーション上の目標を持つ」<sup>9)</sup>ということを強調する。さらに「伝統的な統語論や意味論においては、独立した文や単語が調査される場合には、抽象的な言語形態と意味が問題となり、そこには一般的によく知られている使い方の関連が一緒に考えられている。』<sup>10)</sup>とされ、母国語の話者はこのような使用法の関連を習得してきていると述べられている。このような使用法の関連というのは、一つの言語の慣習的な規則の一部であり、それぞれの話者が言語を習熟する際には基準となる部分でもあることが指摘される。そして外国語学習者は、このような使用法の関連を学習して覚え込むことが求められ、これが自由に正しく使えるようになることが、外国語を習得するための近道であるとされる。しかしながら、一つ一つの文脈から切り離された語彙を詰め込むというのは大変な努力が必要な割にはあまり大きな効果は得られないし、辞書もあまり十分な援助を提供しないことをフンツヌルシャー氏は認めている。さらに仮に十分な内容を持った辞書が存在したとしても、そのような辞書は扱いにくいものであり、使用法の関連を把握することは出来ないであろうことも述べられている。

上記のような考えに基づいて、ドイツ語の形容詞語彙を学習するためのモデルが紹介されることになる。旧来の教授法は、単純な日常会話や文学的なテキストを用いて、その中で使われている単語を学習用の語彙として定めてくるとする。このような場合、テキストを吟味することによって最も重要な語彙領域に近づくことは可能であろうが、効果的でない。フンツヌルシャー氏の提唱するモデルは、日本語とドイツ語の両言語の形容詞語彙に関する日独双方の

研究結果に基づいて考えられている。

このモデルは、2万語を超えるドイツ語の形容詞を、グループ内で約70の意味論表示領域に細分化される12の上位グループにまとめられたものである。このグループ化によって、語彙密度の最も重要な領域が把握でき、さらに使用頻度や機能の豊富な単語を選び出すことが可能となる。指示対象に対して特徴的で、多様な付加情報を提供するという形容詞の語用論的な主要機能に基づいて、意味論的な対比構造が特にはっきりと示されることになる。

最初に約48の対比関係によって、ドイツ語の形容詞が重要な役割をなす指示領域の大半が示される。それぞれの指示領域は、中心となる形容詞とそれ以外の形容詞から成る。ドイツ語の形容詞の主要部分は、基本形容詞と呼ばれ、大半が一音節であり、語幹で示される。ドイツ語の基本形容詞語彙を特徴づける意味論的な対比構造は、造語規則によってさらに拡張可能である。さらにこの対比関係は、直接的な対比以外にも多くの指示領域において強度の度合いということによって拡張がなされる。強度の度合いというのは、

riesig — groß — klein — winzig

heiß — warm — kalt — eisig

のような例によって示されている。いくつかの領域においてはこのような程度の差が重要なものとなる。また色彩や味覚のような領域においては、その領域に属する形容詞は同価として扱われることになる。

フンツヌルシャー氏は、形容詞語彙の完全な理解と指示領域に即した広範囲にわたる配列と、同様に可能な限り完全に個々の単語の使用方法を理解することが、学術的な考察の目標であるとして、この論文を結んでいる。

以上のように、形容詞研究における基本的な考え方を見てきたわけであるが、次のこの論文の中で問題とされているいくつかの点を個別に考察してみたいと思う。

## 2. 形容詞と発話行為

フンツヌルシャー氏は、方法論的基礎について述べた部分で、発話行為論を

用いて、陳述表示型の発話を例としてあげて論を展開しているが、意味論と語用論との関係という点に関して確認をしておきたいと思う。

発話行為論は、周知のようにジョン・オースティン (John L. Austin) によって確立された理論である。この理論は、オースティン以前においては何かの事実を述べる陳述文は、真か偽が問えるものとして扱われてきたが、オースティンはこの検証可能性が問えないような陳述文の存在を認め、このような文を疑似陳述文として分析を行うことにより、単なる陳述としての確認文と、この文を発話することによって何かを行う遂行文とを区別し、発話をする際の発声上の行為や文法行為のような発話行為 (lokutiver Akt) によって何かを言う場合には、発話媒介行為 (perlokutiver Akt) や発話内行為 (illokutiver Akt) が同時に確認、主張、約束、命令などを遂行しているという結論に至る。この中の発話内行為においては習慣が大きな役割を果たしている。さらに通常の確認文は真・偽の検証が可能であるのに対して、遂行文はそれが適切か不適切であるかが問われることになる。オースティンのこのような考え方は、最終的に確認文ですら、発話内行為としての性格を持つもの遂行文であるというような多くの批判の対象になり、現在も議論されている考えに至ることになる。このようなオースティンの考え方をジョン・サール (John R. Searle) が体系的な理論化を試みた。サールは、オースティンが明確に示さなかった慣習という概念を規則に支配されたと捉え、発話内行為を成立させるための必要十分な規則を列挙した。またサールは、オースティンの理論において、発話行為がなんらかの発話内行為であるとすれば、発話行為において文は意味を伴って発せられるものである以上、意味行為を行うことは発話内行為を行うことと同じことになり、意味行為の役割が失われることになるという批判に対して、言語行為における命題的な部分とその行為の発話内行為の分類を示す部分との区別として捉えなおしている。この考えには、命題行為という概念が導入され、指示したり述語づけされたりする行為も、ある種の発話内行為として一定の習慣によって分析することが出来る可能性も開いたとされる。<sup>11)</sup>

フンツヌルシャー氏は、発話行為論を「与えられた状況に即した条件である



コミュニケーション上の目標」<sup>12)</sup> を具体的に示すための手段として用いているわけであり、また主語と述語から成る単純な文が「ある対象の特定とその対象を特徴づける付加情報を付け加えるものである」<sup>13)</sup> という観点で、これを表す最も一般的な文は動詞か述語的形容詞の形で表現されるという形容詞の機能の重要性を強調するために用いているように思われる。しかしながらこのような種類の文においても、単に対象を特徴づけるだけではなく、発話内行為の観点での考察が必要であるように思われる。例えば、

Die Ampel ist rot.

というような文の場合、これは単に信号機が赤であるという信号機の特徴づけだけではなく、状況によっては「(信号は赤だから)止まれ」というような注意を喚起する、あるいは停止を命令する文としても捉えることが可能であろう。このような場合には、形容詞 rot を色彩を表現するカテゴリーにのみ分類するのは不十分である。

また発話行為論とは離れるが、色彩を表す形容詞には以下のような場合も考えられる。

Er ist blau.

このような色彩から派生して、他の意味を持つようになった形容詞の場合に、このような形容詞をどのように扱うのかの考察が必要であるように思われる。

### 3. 形容詞のカテゴリーについて

上記のような形容詞のカテゴリーについてフンツヌルシャー氏は、約 70 の意味論的な領域に細分化された 12 の上位カテゴリーを設定している。このカテゴリーがどのような基準で設定されているのか論文中では述べられていないが、このカテゴリー分けはデータベース作成に際しては重要な要素となると思われる。そこで意味に関するカテゴリーに関しても概観しておきたいと思う。

カテゴリーについて考える前に、概念についても簡単に触れておきたいと思う。概念というのは哲学事典によれば、「概念は言語とともに生まれ、言語によって表現される。言語によって表現される概念を「名辞」という。これは文



法という名詞または単語に相当するもので、主語や述語として命題の構成要素になるものである。」<sup>14)</sup>とされている。この記述から、語の意味とは概念の意味ということを表している、と見て取ることが出来る。アリストテレス以降、概念はある対象を他から区別する特徴として捉えられてきた。そのために概念は外界の事物や事象を分類するためのカテゴリー化と関係している。近年認知科学の発展により、概念に関して新しい考え方が導入されるようになってきている。このような認知科学的な研究の中に、自然物に対するカテゴリーには明確な特徴による境界は存在しないし、カテゴリー名は知覚的世界のもつ構造に対応して付けられているという考え方も現れてきた。この考えは、言語獲得の初期段階に覚えられるものを基礎対象と呼び、これを基礎カテゴリーと見なす。この基礎カテゴリーを中心に上位カテゴリーと下位カテゴリーが複数存在し、あるものがどのカテゴリーに属するかは、そのものの属性によるというものである。これは、個々のカテゴリー間の構造とカテゴリー内の構造により概念の意味を捉えようとする理解されている。<sup>15)</sup>

概念の意味を、その特徴によって捉えようとする試みは、言語学における語の意味特徴の研究と類似する点が多い。その中でも、語の意味を表現する方法として意味特徴による単語の表現と意味のネットワーク論<sup>16)</sup>について述べてみたいと思う。

この理論は、意味確率説と呼ばれ、スミス (E. Smith) などによって考え出されたものであり、概念や名詞の意味を意味特徴あるいは意味属性の集合によって表現しようとするものである。ある名詞あるいは概念に、それぞれが持つ特徴を与え、その特徴を重みづけし、それを数値化する。この数値は、その名詞あるいは概念と特徴がどのくらいの確からしさで結びつけられるかを表し、1.0 という数値を持つ場合にはその名詞あるいは概念が必ずその特徴を持つということを表す。以下のようなものが例としてあげられている。

コマドリ	ニワトリ	鳥	動物
1.0 動く	1.0 動く	1.0 動く	1.0 動く
1.0 翼を持つ	1.0 翼を持つ	1.0 翼を持つ	0.7 歩く

1.0 羽を持つ      1.0 羽を持つ      1.0 羽を持つ      0.5 大きい  
 1.0 飛ぶ            1.0 歩く            1.0 飛ぶ

この理論は、しかしながら名詞や動詞以外の語の概念を意味特徴によって表現するのが困難であるという問題点がある。この意味確率説の弱点を補っているといわれるのが、意味ネットワークである。意味ネットワークは、コンピュータによる言語理解のモデルとして考案されたもので、階層構造を持ち、各概念がネットワークのように関係づけられている。上記のような意味記述のための理論は、心理学的に様々な方法によって検証されてきているが、これらの理論をそのまま形容詞の概念表示に利用することは困難であると思われる。またカテゴリー分けに際しても、明確な特徴づけの基準が必要であり、これをどのように決定するかを今後明らかにしなければ、コンピュータ処理をする場合に問題が生じてしまうように思われる。

#### 4. 言語情報と語彙意味論について

カテゴリーや意味表示の問題点を解決するために一つの手がかりになりそうなのが、語彙意味論と言語情報ための辞書情報であろう。言語情報のための辞書情報としては、形態素、統語、意味、談話それぞれのレベルにおいて記述される情報があるが、ここでは特に意味レベルでの情報について見ることにしたい。

語の意味を規定する場合、

- 意味素性による分類
- 概念識別子による分類
- 同義語の集合を利用した分類

の3つのアプローチで捉えることが多いという<sup>17)</sup>。この中でも意味素性は、語の基本的な意味を整理分類したもので、これを個々の語に与えることによって、語の意味を区別することが出来るもので、同じ語であっても別の意味素性が与えられることによってそれぞれ異なった扱いをすることが出来るようになる。この意味素性の要素を取り入れた NTT の意味体系辞書では、語を一般名詞、

固有名詞、用語に分類し、約 3000 の意味素性を定義して、その定義の間には上位・下位関係が階層構造をなして定義される。分類語彙表に代表される語の類義関係に基づいて語が分類されるシソーラスの場合、意味分類の間の関係は上位・下位関係で表されることが多いといわれるが、プリンストン大学で開発された WordNet の場合には、語をまず文法的な観点で名詞、動詞、形容詞、副詞に分類し、それぞれの分類を同義関係に基づいて意味的な観点から分類するという方法がとられているという。これは分類語彙表の考え方に近いが、WordNet ではさらに同義関係の他に

- 反意関係
- 上位/下位関係
- 部分/全体関係
- 動詞の階層関係
- 継承関係

という 5 つに同義関係を含めて、関係づけを行っているという<sup>18)</sup>。この中で反意関係については、形容詞と副詞に関して記述される関係である点は注目に値すると思われるのではないだろうか。他の意味表示や意味特徴に関する研究においては、統語論との関係においても重要な名詞と動詞の意味表示が中心になっているわけだが、WordNet が形容詞・副詞を含めた辞書記述を持っている点は今後の参考になるのではなかろうか。特にフンツヌルシャー氏が論文で対比関係の中での形容詞語彙の関連づけを行っていることも関連性を見いだせるのではないかと思われる。

## 5. おわりに

これまでフンツヌルシャー氏の論文を中心に、語用論的な観点での見直しと語彙検索システム構築のためにはどのようなことが必要なのかをごく簡単にまとめてきた。ここで確認できた点としては、形容詞のカテゴリー分類をする際の明確な基準の設定と、形容詞の意味表示をどのように行うかがはっきりしていないということである。論文中でフンツヌルシャー氏は、「言語理論と言語実

践の関連を語彙意味論を例として明白にすること」<sup>19)</sup>と述べているが、語彙意味論に関しては明確な記述がないため氏がどのような考えでいるのかわからない。語彙意味論に関しては、Jackendoff の提案による語彙概念構造や、生成語彙のような語の多義性を取り扱う分野があるわけだが<sup>20)</sup>、これを今後どのように活かしていくのかも考察しなければならない点である。最終的に語彙検索システムを構築するには辞書の問題も避けて通れない点である。また言語学習に関しても、実際に対比関係によって効率よく学習が進むのかどうかの研究も、言語心理学のような分野の研究を利用して検証してみる必要があるように思われる。

### 注

\*この論文は、獨協大学国際共同研究に基づいて執筆されたものである。

- 1) この論文は、2005 年 4 月 5 日に獨協大学において開催された国際共同研究研究会において配布されたものである。
- 2) „Lexikalische Semantik und Sprachunterricht“ S. 1
- 3) 同上 S. 1
- 4) 同上 S. 2
- 5) 同上 S. 2
- 6) 同上 S. 3
- 7) 同上 S. 9
- 8) 同上 S. 9
- 9) 同上 S. 10
- 10) 同上 S. 10
- 11) J. L. オースティン(坂本百大訳)『言語と行為』S. 337-349
- 12) „Lexikalische Semantik und Sprachunterricht“ S. 2
- 13) 同上 S. 7
- 14) 『哲学事典』平凡社
- 15) 御領謙他『認知心理学への招待』S. 141-148
- 16) 同上 S. 149-158
- 17) 郡司隆男他『岩波講座 言語の科学 3 単語と辞書』S. 172
- 18) 同上 S. 179
- 19) „Lexikalische Semantik und Sprachunterricht“ S. 1
- 20) 松本裕治他『岩波講座 言語の科学 4 意味』S. 147-150

### 参考文献

- 加賀野井秀一『20 世紀言語学入門』、講談社 1995  
 郡司隆男他『岩波講座 言語の科学 3 単語と辞書』岩波書店 1997  
 御領謙他『認知心理学への招待』サイエンス社 1993  
 芳賀純『言語心理学入門』有斐閣 1988

- 松本裕治他『岩波講座 言語の科学 4 意味』岩波書店 1998  
 松本曜『認知意味論』大修館書店 2003  
 守一雄『認知心理学』岩波書店 1995  
 J. L. オースティン(坂本百大訳)『言語と行為』大修館書店 1978  
 J. M. セイダック(木下裕昭訳)『発話行為の言語理論へ向けて』文化書房博文社 1995  
 J. R. サール(坂本・土屋訳)『言語行為』勁草書房 1986  
 Hundsnurscher, Franz „Lexikalische Semantik und Sprachunterricht“ 2005

# Eine Überlegung über lexikalische Semantik und Sprachunterricht

Mitsuru KANAI

In diesem Aufsatz wird eine Arbeit von Hundsnerscher über lexikalische Semantik behandelt. Dabei möchte ich versuchen, einige Probleme aufzuzeigen und herausfinden, wie ein mit Computer bearbeitbares Wörterbuch aussehen sollte.

Im Rahmen der internationalen Forschungsgruppe an der Dokkyo Universität über die deutschen Adjektive hat Hundsnerscher aus Münster eine Arbeit mit folgendem Titel vorgelegt: „Lexikalische Semantik und Sprachunterricht“.

In der Arbeit werden zwei Ziele verfolgt.

1. Den Zusammenhang von Sprachtheorie und Sprachpraxis am Beispiel der lexikalischen Semantik explizit zu machen.
2. In einem bisher in der Literatur ziemlich stiefmütterlich behandelten Bereich des Fremdsprachenunterrichts, nämlich dem Vokabelerwerb, exemplarisch neue Wege zu beschreiben.

Hundsnerscher stellt zuerst ein Sprachkonzept vor. Er geht davon aus, dass die kommunikativen Zwecke, denen die sprachlichen Äußerungen im einzelnen dienen, durch die Illokutionstypen erfasst und umschrieben werden. Dabei erwähnt er die Sprechakttheorie. Hundsnerscher führt aus, dass man mit ein und derselben Äußerung, je nach den situativen Bedingungen, verschiedene Sprechakte vollziehen könne und derselbe Sprechakt andererseits jedoch mittels verschiedener Äußerungen vollzogen werden könne. Er erklärt weiterhin, dass sich die Geeignetheit der Äußerungen zum Vollzug bestimmter Sprechakte aus ihrer sprachlichen Form, aus ihrem syntaktischen Bau und ihrem lexikalischen Gehalt ergebe und die einzelnen Sprechakttypen generelle Muster hätten. Sprechakttheoretisch gesehen bringe der einfache Satz einen zugrunde-

liegenden Sachverhalt zum Ausdruck und dies geschehe mit Hinweisen auf einen zu identifizierenden Gegenstand und durch das Hinzufügen einer charakterisierenden Zusatzinformation. Die Zusatzinformation könne in ihrer einfachsten Form durch ein Verb oder durch ein prädikatives Adjektiv geliefert werden. Hundsnurscher behauptet, dass die Adjektive einen wichtigen Beitrag leisten. Über 20.000 Adjektive werden bedeutungsgemäß zu einem Dutzend Großgruppen zusammengefasst. Diese Gruppen sind intern in etwa 70 semantische Referenzbereiche ausdifferenziert.

In dieser Arbeit scheint mir, dass es bei der Differenzierung einige unklare Stellen gibt. Welche Rolle spielt die Sprechakttheorie und unter welchen Bedingungen sind die Gruppen ausdifferenziert?